

News Letter

自治医科大学地域医療オープンラボ

Vol. 14, January, 2008

文部科学省「魅力ある大学院教育」イニシアティブ

学長付医師（地域支援）について

自治医科大学 学長 高久 史磨

平成20年の新春を迎え、この3月で1期生が卒業して30年になります。卒業生も3000名を超え、地域医療におけるその活躍は広く社会の認めるところです。自治医大では、卒業生が地域において孤立しないように、また、生涯学習やスキルアップ・キャリアアップの機会が得られるように様々な施策を行ってきました。自治医大のホームページをご覧頂ければ、附属病院やさいたま医療センターにおける「後期研修」、地域医療学センターが主催する「地域医療後期研修プログラム」、がんプロフェッショナル養成プランにおける「全人的ながん医療の実践者養成」、大学院教育改革支援プログラムにおける「新時代の地域医療学を創る人材の包括的養成」など、卒業生にとって有益と思われるプログラムが掲載されています。また、平成18年度から始めました大学院における社会人入学枠も地域医療に携わりながら、自治医大の大学院教育を受けることができる制度です。



ところで、学長付医師（地域支援）は、本学の建学の精神に基づく社会的使命を果たすために、平成10年度から地域医療を支援するための教員定数として設け、運用しています。従来定員4人でしたが、昨今の地域における医師不足、診療科偏在等の問題が深刻化するなか、より一層の地域医療支援を図るため、定数を10人と増員し、地域医療支援事業に協力頂ける医師を募集しています。3年を1クール（延長可能）とし、2年間は学内で各人が希望する研修、研究、教育、診療等に従事した後、1年間地域医療支援を行います。処遇は助教以上で、現在、教授2名、准教授1名、助教3名がその任に当たっています。生涯学習・ブラッシュアップ研修や研究を行うためにも良い機会になるのではないかと思いますので、学長付医師（地域支援）に応募し、この制度を活用して頂ければと願っています。

学長付医師（地域支援）について

目的

本学としてブロック拠点病院の確保等へき地医療支援のための医師派遣に備え、併せて医師派遣審査会において決定された大学重点病院等への関係講座からの医師派遣が不可能な場合等に備えるため、学長付医師（地域支援）を設置する。

定数

10人とする。ただし、ブロック拠点病院の確保等のために定数増の必要が生じた場合には、教員後継者定数を活用する。

資格

- (1) 本学が展開するへき地医療支援のための施策に積極的に参画する気概を有する者
- (2) 自治医科大学教員の任用基準（臨床歴5年以上など）に適合する資格を有する者

処遇

- (1) 助教以上とする。
- (2) 所属は地域医療学センター地域医療支援部門とし、希望する講座（診療科）との兼務を認める。

業務

- (1) 医師派遣審査会が決定した派遣病院等における業務に一定期間従事する。
- (2) 本学在任中は、兼務する講座（診療科）の教育、診療業務に従事するほか、所属長及び兼務する講座（診療科）の責任者と本人が協議のうえ、高度な医療技術等修得のための研修や研究に従事する。
- (3) 派遣病院等での診療に当たり必要とされる医療技術等を修得する。

所属長の措置

派遣前の研修であることを考慮し、所属長は次の措置を講ずるものとする。

- ① 外来診療担当日数の配慮
- ② 病棟診療における担当患者数の配慮
- ③ 所属以外の診療科における必要な技術修得のための配慮
- ④ その他学長が必要と認める措置

任用期間

- (1) 原則として3年（本学勤務期間2年、派遣期間1年）とする。ただし、医師派遣審査会の承認を得た場合は、延長することができる。
- (2) 派遣期間は、概ね本学勤務期間の2分の1の期間とする。
- (3) 任用期間満了後の進路については、本人の意向を勘案し医師派遣審査会が配慮する。

社会人大学院入学半年を過ぎて

地域医療学系専攻1年(東京臨海病院 脳神経外科) 藤井 博子

私は自治医科大学の脳神経外科医局とその関連施設にて、ひたすらに4年間臨床業務に携わらせていただきました。当初は、臨床において必要な患者様への対応や、最低限の医学的知識・手技を学ぶことで手一杯になることが多い毎日でした。そのがむしゃらな毎日で、当然ながら、知りたい・学びたい分野は少しずつ変わっていき、自分の専門とする脳神経外科に関わる新たな専門的知識やその手術手技への追求が多くなっていきました。それに伴い、勉強の時間を有効に持ちたいという意識が強くなりました。もともと臨床業務への貢献をしたという意志が強いのですが、さらに大学院に入学し、臨床勤務と平行して、新たな分野の開拓など、研究者としても活動したいと考えるようになりました。



昨年より、東京臨海病院脳神経外科に所属しておりますが、それと同時に自治医科大学の社会人大学院に入学させていただきました。改めて勉強・研究への道に進みだしたことの喜びを実感致しました。入学後の感想は、臨床と研究との両立は貪欲で響きよくも聞こえますが、実践は非常に難しい、ということが本音です。研究日のない診療の日々では、なかなか大学に通うことができません。一部インターネットを介して大学院講義受講はできるものの、大学への研究相談や資料集めなどに困惑しました。勤務地が変更した直後にて、研究を開始する体制作りにも時間と労力、自身だけではなく周囲の理解と協力が必要でした。しかしながら、その中でも院所属科教授を始め、大学院生のバックアップをしてくださるラボの先生方や大学事務の方々にとっても助けられ、アドバイスをいただきながら進み、今に至ります。

現在は近隣の大学の先生に学外講師となっており、ご教示いただきつつ、勤務先病院のスタッフの協力のもと資料集めをし、臨床業務の終了後に研究を行うという流れを作ることができました。私は、臨床と並行しているからこそできる研究項目としています。来年の専門医取得を前に、手術など臨床業務も精一杯こなしつつ、自分のスタイルで進み始めた研究に関しても、進行を楽しみながら過ごすことができると予想しています。その過程で、時間の使い方や研究の内容・進行速度は、今後も課題になると考えています。

この短期間で得たことは、大学院遂行までの勉強や人間関係は、かけがえのない私の宝になるのだろうという自信と確信だと思います。

自治医科大学医学部卒業生の学位取得状況把握のためのアンケート結果その10 (最終)

26期生・29期生のご意見を自由意見記載欄より抜粋しました。

◆現時点では具体的に大学院のことは考えていないが、今後、こうした仕組みがあることでハードルが低く感じ、より選択肢として考えやすくなる。◆離島勤務になると通常の研修すら受け入れていない実情だ。学位資格に必要な条件を整理・提示して欲しい。◆今まで大学院に行くなら義務年限終了後しかなかったが、選択肢が増え自治医大卒業生の可能性が広がっていく。◆専門医取得に論文と学術発表が必要。地域医療を行いながら単独で取得するのは難しい。専門医取得目的での研究も指導して欲しい。◆義務年限中は難しい。週1回通学は不可能。インターネットやEメールを十分に活用していかないと難しい。◆社会人入学で研究テーマと診療がリンクしていないと負担がかかり、休養時間を取れなければ家庭を犠牲にしかねない。独身の人がお勧めか。◆学位に関する事柄など、卒業研修後すぐに僻地で勤務する若い医師には理解する機会がない。同じような境遇を過ごされた先輩方の意見や体験などの資料があれば良い。◆卒後すぐは臨床能力向上に力を入れるべき。卒後10年程度の臨床能力が十分になった時期ならば大学院進学は選択肢に入る。◆社会人枠は地元大学を考えている。◆社会人枠大学院へ進学した場合の具体的なイメージが浮かばない。◆今後サブスペシャリティとして従事したい分野がはっきりすれば当制度の積極的な利用による進学も考えたい。◆大学院進学が身近になった。◆地域中核病院で日々の臨床で手一杯で、研究面に関して学生時代や研修医の頃に比べ、モチベーションを保つのが大変。研究面での支援を受けられる体制がしっかりしていれば地域にいながら研究ができる機会にめぐり合える可能性がある。◆義務年限中に社会人大学院に入学するには周囲の理解が不可欠。◆現時点では、研究よりも臨床で技術を磨いていきたい。余裕ができたときに研究、勉強も考えていく予定。◆もう少し臨床で経験をつんで、興味があれば研究も考えたい。◆地元大学大学院へ社会人枠として入学し、基礎研究を行っている。自治医大まで距離があると基礎研究は厳しい。◆遠方の県では定期的に大学に行くのは難しい。通信教育のような形式で学位は取れないのか。◆義務年限中の大学院進学を考えたことはなかったが、自治医大に新しい体制ができ今後の選択の幅が増えた。前向きに検討してみたい。◆義務年限が終わらないと大学院進学は検討しにくい。◆自治医大卒業生の社会人入学枠をもっと増やせば卒業生の研究意欲も高まる。◆今はまだ卒後3年目で学位のことよりも、とにかく多く知識がほしいのとスキルアップしたい。◆働くほどに自治医大卒業生の義務の重さを感じている。このような活動をありがたいと思う反面、このような苦労をしなくて済むような制度をつくるべきだとの思いが強くなる。◆もっと具体的な例を示して欲しい。◆興味があるが、県や行政とのかかわりを考えるとなかなか難しい。◆地域で余裕ができそうであれば、ぜひとも参加したい。◆まだ研修医の立場でゆっくり考えたことがなかったが、これから考えてみたい。◆大学ホームページなどを利用して広く広報活動を行って欲しい。◆自治医大は多くの卒業生が本学から離れてしまうので、インターネットやEメールなどで、大学とのつながりができるのはいいことだ。◆地域で義務年限を果たしながら、大学院で勉強できるという制度はとて素晴らしい。◆多くの先生方の意見を聞いてゆっくり考えようと思う。

自治医科大学大学院医学研究科

地域医療オープン・ラボ運営委員会

事務局 大学事務部学事課 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1
TEL 0285-58-7044 / FAX 0285-44-3625 / e-mail openlabo@jichi.ac.jp
<http://www.jichi.ac.jp/graduate/index.htm>